

JCへの入会は「スタート」 同じ志を持った仲間と共に「想い」を「形」に

一関青年会議所(JC)の活動は、時代と共にさまざまに変化してきました。60年の歴史は、時代に合わせた柔軟な活動が紡いできたもの。先輩の実績や功績があつてこそ、現在のJCはまちの皆さんとの信頼関係を築き、さまざまな活動に取

り組めます。

JCが目指すのは「明るい豊かな社会の実現」。抽象的な表現だからこそ、幅広い解釈ができます。それぞれが思い描く、まちの未来は十人十色です。しかし、「一関を盛り上げたい、元気にしたい」という願いはみんな一緒。JCにはそんな思いを抱いた仲間が集っています。

現在、会員は35人。元気で、ノリがよく、団結力・結束力が強く、おもしろいメンバーです。私自身、メンバーと夢を語り合い、活動をしていく中で「心の基礎体温」が上がりました。無意識のうちに冷めてしまった思いに、再び火が灯ったような感覚です。同じ志を持つ仲間と「想い」が連鎖することで、活動という「形」に変えられます。

今年、設立から60周年の節目。スローガンは「継承、次世代への礎たらん！～つなぐ、広める、深める」です。先輩の事業を受け継ぎ、未来に引き継ぐ「つなぐ」。活動や思いを多くの人に発信する「広める」。そ

して、JCの歴史や過去の事業を振り返る「深める」。スローガンに沿って、JCのアイデンティティを強めよう取り組みました。

これからの目標は、スケールの大きい事業を展開すること。我々の活動が、まち全体を動かすような、スケールが大きいことをしてほしい。それには、より多くの仲間が必要です。JCを存続させるためではなく、自ら仲間を求めて集まるようになればうれしいですね。

「JCはJCの為のみにあらず」。JCに入ることは、自分、会社や地域のためになります。JCでは、仲間との協議を重ねて、事業を企画します。物事を決定させるまでのプロセスを学ぶこと、仲間とコミュニケーションを図ること、たくさんの人たちとの出会いの中で礼儀を学ぶことは、自身のスキルアップにもなります。JCは、ビジネススクールであり、サークルであり、修練の場です。入会は「スタート」に過ぎません。

我々の理想は、若者たちがJCというプラットフォームで育っていくこと。活動を通して、地域の発展に寄与し、自分たちも成長していくことです。



齋藤 賢 第60代理事長

Saito Ken

1975年生まれ。桜町出身。一関一高から明治大へ進学。卒業後、スイス・ローザンヌホテルスクールへ。2002年に、フォーシーズンホテル丸の内東京に入社。その後、(株)齋藤松月堂に入社し、12年に代表取締役役に就任。同年に一関青年会議所に入会し、15年に理事長に就任。

一関青年会議所。そこには、地域の発展を願って汗を流す若者たちがいる。たゆまぬ努力で「想い」を「形」にしようと挑む精神がある。60年もの歳月を超えて、受け継がれてきた高い志がある。誰もがまちの未来を思い、二関のために何ができるだろうと考える。しかし、いいアイデアを思いついても、一人でできることには限度がある。諦めてしまう人も少なくはないだろう。

一人一人が描く未来は違っても、一関をもっといいまちにしようと願う気持ちは同じ。そう、私たちは志を共にする仲間だ。仲間とまちの未来を語り合えば、「想い」は広がる。仲間が背中を押してくれば、挑戦する勇気が湧く。仲間の協力があれば、一人では到底できないことも「形」にできる。同じ志を抱く仲間が集まれば、まちをも動かす大きな力になる。

さあ、一歩踏み出そう。「想い」を「形」にするために。

継承、次世代への礎たらん つなぐ、広める、深める

1 和田秀樹氏講演会

講師に和田秀樹氏を迎えた講演会は6月19日、一関文化センターで行われ、市民ら約450人が熱心に講話に聞き入りました。和田氏は国際医療福祉大学大学院教授で、大学受験のオーソリティ。「夢をつかめ～この差は何か?目標達成できる人できない人」と題し「夢をつかむ方法」を熱弁した。一関一高1年の小野寺朱李君は「受験の概念が覆った。講演を勉強に生かしたい」と話してくれました。

2 1984年からのメッセージ～タイムカプセルを開封

1984年に埋設したタイムカプセルの開封式は6月21日、JR一関駅前で行われました。式には、関係者らなど約30人が出席。30年をかけたプロジェクトの完結を祝いました。タイムカプセルには、当時小学6年だった児童が夢などを描いた色紙を封入しました。開封に駆け付けた佐藤礼子さん(42)は「タイムカプセルのことを気にかけていました。当時はよみがえります」と色紙を見つめていました。

3 二代目時の太鼓大巡行

一関夏祭りの恒例行事「二代目時の太鼓大巡行」は8月8日に行われ、威勢のいい掛け声をあげながら街を練り歩き、その歴史と誇りの音色を轟かせました。同イベントは、同会議所が「市民参加型の祭りをつくりたい」と1976年に開始。今年で39回を数えます。高橋さん(89)は「太鼓の音は勇ましくて大好き。毎年、楽しみにしています。時の太鼓は、一関の誇りです」と話してくれました。

4 JCサイエンスキャンプILC

市内の小学校5、6年生を対象にした「JCサイエンスキャンプILC」は9月5日から1泊2日で行われました。キャンプ地は、茨城県つくば市。「将来のノーベル受賞者を一関から」をスローガンに掲げ、高エネルギー加速器研究機構(KEK)、宇宙航空研究開発機構(JAXA)筑波宇宙センターなどを見学しました。児童らは、最先端科学に触れ、未来への夢を膨らませていました。

5 タイムカプセル埋設

タイムカプセルの埋設式は10月4日、JR一関駅前で行われました。カプセルには「JCサイエンスキャンプILC」に参加した児童らが「挑戦したいこと」や「どういう一関にしたいか」など20年後の未来へ向けたメッセージを封入。20年後に、全員で揃って開封することを誓いました。参加した一関小5年の橋階健太郎君は「将来の夢は、科学者になること。カプセルは自分の手で開けたい」と話してくれました。



60周年記念事業を展開し「これから」の礎を築く

今年、創立60周年を記念して、さまざまな事業が展開された。スローガンは「継承、次世代への礎たらん！～つなぐ、広める、深める」。齋藤理事長は「スローガンのもと、一関青年会議所のアイデンティティを強め、これからの礎になるよう全力で取り組んだ」と振り返る。

6月には、記念講演会「夢をつかめ」を開催。講師の言葉を通じて、若者に夢をかなえる勇気を与えた。また、1984年に埋めたタイムカプセルを開封。30年越しのプロジェクトを完成させた。8月には、毎年恒例の「二代目時の太鼓大巡行」を実施。9月には、児童の科学への理解を深め、一関の未来を描くきっかけにと「JCサイエンスキャンプILC」を開催し、昨年に続いて2回目の成功を収めた。

60年間、代々受け継がれてきた志、想いや信念は、今も現役メンバーによって引き継がれている。

高い志とまちへの想いは地域の未来を切り拓く